

道徳科学研究所のイスラーム研究は何をし、 今後何をなすべきか

田島 忠篤

1. はじめに

廣池千九郎法学博士（以下廣池と記し、それ以外の人物も敬称を略す）は、『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』を昭和3（1928）年12月に出版した。その狙いは人心開発救済を通しての世界人類の安心、平和、幸福の実現であるが、その実践で主張したのが「世界諸聖人」の教えと実践の中から抽出した「最高道徳」である。その「最高道徳の実行者」を、キリスト教の Saint（聖人）とは異なる意味で「聖人」（以下、特別の表記のない限り「最高道徳実践者」の意味で用いる）と表記し、ソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、孔子、歴代天皇を最高道徳の実践者として「聖人研究」を始めた。その際、当時すでに世界宗教として確固たる地位を固めていたイスラーム（イスラム教）に関しては、以下のように記している。

このほか、イスラム教の開祖マホメットも世界の精神界における一部の勢力を占めておる人ではあれど、その心はとにかく、その行動は二十世紀以後の最高道徳の模範にはならぬように思われますから、これは除きました。しかしこれまでの日本においてはマホメットの事跡を研究することは不便でありましたから、これは私の研究室において引き続いて後日に研究の出来たときにその詳細を発表いたします。（『論文』⑤：4-5、○の中の数字は巻を示す、下線は著者）

上記のように、廣池はムハンマドの心／精神性を認めていますが、その行動は「20世紀以後の」と時代を明記して最高道徳の模範にならないとしたうえで、しかし、当時の学問状況では確証が得られないから継続して研究し、発表するように後進に委託している。

廣池からの後託を受けて、道科研では、大塚真三（1956年より研究員、研究部部长1966-69）、保坂俊司（研究員1998-2017）、服部英二（顧問1995-2017）、谷口茂（非常勤嘱託2008-2017）らが研究し、その成果をモラロジー団体内外の出版物、講演で公表したり、イスラーム研究者片倉もと子（片倉2012）を招聘した研究会を開催したりして廣池の後託に応えてきた。

その間、聖人研究として、昭和 56-57 (1981-82) 年度には、『論文』出版以後の聖人に関する研究動向を追い、さらに昭和 61 (1986) 年度から比較文化研究室が諸聖人の伝記に関する明治以後の邦文文献リストを公表してきた。これらの聖人研究成果を踏まえて、平成 8 (1996) 年には、生涯学習部門と協力して「聖人研究セミナー」を起し、平成 11 (1999) 年まで 4 回に分けて開催した。

この聖人研究は、平成 13 (2001) 年、人間学研究室に移管され、「現代的再検討と継承・発展」という目標を掲げて「聖人研究プロジェクト」が発足した。そして、第 1 期平成 14-15 (2002-03) 年度では廣池の聖人論を検討し、第 2 期、平成 16-17 年度 (2004-05) では、各聖人を対象として研究し、公開研究会も実施してきた。これらの成果は、『聖人の思想とその現代的意義—孔子・釈迦・イエス・ソクラテスに学ぶ』(道徳科学研究センター編 2009) として、また、その続編として『いのちと愛の思想—廣池千九郎の聖人研究の継承と発展』(竹内編著 2010) が公表された(竹内編著 2010: 215-23)。前回の出版に掲載されなかったムハンマドも平成 22 (2010) 年の出版物には含まれている。

その後、平成 25 (2013) 年、当プロジェクトのリーダーを務めるイスラーム研究員が本研究所に加わり、令和 2 (2020) 年度、イスラームの創始者に特化した共同研究「ムハンマドを含めた聖人研究の展望」プロジェクトが立ち上がった。その目的は、従来の方針を引き継ぎ①廣池の後託による聖人研究の継承と発展、②ムハンマドの聖人性およびイスラームの現代的再検討・意義に絞り、さらに、③モラロジー生涯学習で使用できるテキスト作りを加えて、すなわち研究と実践をもとに研究会を重ねてきた。

本発表の目的は、前記の研究成果をレビューし、今後の研究課題を展望することである。まず、研究員ごとにこれまでの成果をまとめたうえで、今後の展望を述べる。

2. 各研究員の研究内容

①大塚真三 (1919-1995: 元麗澤大学外国語学部教授)

大塚は、昭和 31 (1956) 年の道科研設立からのメンバーであり、昭和 54 (1979) 年まで在籍しており、その間、昭和 41 (1966) 年から 44 (1969) 年までは部長を務めていた。イスラーム関連の研究では、『社会教育資料』86号 (1983年6月)、87号 (1983年9月)、88号 (1983年12月) に「ムハンマド (マホメット) 研究」を三回に分けて報告している。86号の「はじめに」に記してあるように、イスラームについて学習するための基礎知識を提供するために、当時の日本で入手可能な資料を基にまとめたものである(大塚 1983a: 147)。注目すべき点は、現在一般的な表記となりつつあるイスラム教をイスラーム、マホメットをムハンマドと表記している点である。

②保坂俊司 (1956-: 現中央大学国際情報学部教授、麗澤大学大学院言語教育研究科教授: 1992 ~ 2008 年度)

世界的仏教学者である中村元が創設した(財)東方研究会・東方学院において仏教およ

びインド学の手ほどきを受け、同学院派遣留学生として国立テリー大学に留学し、文献のみならずフィールドワークも取り入れ、仏教、イスラーム、シク教（保坂 1992）などインド社会を研究している。平成 16（2004）年『モラロジー研究』54 号から「『道徳』の源泉としてのムハンマド（1）—イスラーム教徒にとってのムハンマドはいかなる人か」を皮切りに、翌年の 55 号では「『道徳』の源泉としてのムハンマド（2）—イスラーム教徒にとっての道徳を理解するために」（保坂 2005a）、56 号では「『道徳』の源泉としてのムハンマド（3）—イスラームにおける『宗教』を理解するために（その一）」（保坂 2005b）、57 号では「『道徳』の源泉としてのムハンマド（4）—何故ムハンマドは救済の手本とされるか」（保坂 2007）を公表してきた。また、先述の『いのちと愛の思想』において「イスラームにおける愛—預言者ムハンマドの生涯と神の愛」（保坂 2010：85-104）を著わしている。この他にも『イスラームとの対話』（保坂 2000）、『ブッダとムハンマド』（保坂 2008）の著書がある。道徳や宗教といった基本概念を比較文明学の視点から再考し、ムハンマドとイスラーム研究について新たな視点を導入した。

③服部英二（1934-：元ユネスコ文化担当特別事業部長、元麗澤大学・大学院比較文明文化研究センター客員教授および道科研教授・顧問 1995-2017）

ユネスコの世界遺産策定当初より比較文明の視点からイスラームのみならず古今東西の文明・文化を実査している。服部は「シルクロードは、砂漠の道・草原の道・海の道を問わず、何よりも文明間の対話の道であった」（昭和 60（1985）年ユネスコ「シルクロード総合調査計画」の起草文の冒頭）という主張を受けてハンチントンの「文明の衝突」に対するアンチテーゼを発信している。比較文明の視点から執筆しているため、イスラーム単体を対象とした論考（服部 2009：35-53、2020：171-93）は少ないが、種々の論文で言及している。その成果は、講談社、藤原書店、北海道大学出版会のみならず麗澤大学・モラロジー道徳教育財団でも多数出版されている。

④片倉もと子（1937-2013：文化人類学者、元国際日本文化研究センター所長、同センターおよび国立民族学博物館、総合研究大学院大学の名誉教授）

文化人類学者である片倉を招聘して共同研究会を開催した折、彼女が基調講演をした内容である。「湾岸戦争」、「アフガニスタン戦争」、それに「9.11 同時多発テロ」と戦争やテロ事件を通してしかイスラームに関する情報が入ってこない日本人にとって、イスラームの日常生活を比較文化的な視点から紹介している。ニュースにならないイスラームの日常生活とその底に流れる信仰を日本文化に照らし合わせて理解することがいかに大切か、を発信している。

⑤谷口茂（1933-2022：麗澤大学名誉教授）

廣池のムハンマドとイスラームに対する問いに直接回答を試み、2 回にわたり『モラロジー研究』に掲載された論文である。『論文』で多用されている文献に記されたムハンマ

ドに対する記述内容が、廣池の先述した引用文に影響したと考えて、論考をすすめている。後述するように『論文』執筆当時の欧米で、ムハンマドおよびイスラーム研究で何故そのような判断に至ったのか、ムハンマドが生きた時代状況を基に解き明かしている。次章で、その詳細を示す。

3. 廣池の問いに応えた谷口論文の詳細

本研究会では、前回フォーラムで竹内が資料集で取り上げた谷口論文について詳細に検討し、今後の研究課題について論じた。なぜ谷口論文なのか、その理由は「その心はとにかく、その行動は二十世紀以後の最高道徳の模範にはならぬ」と指摘した廣池の意図を解明しているからである。注意すべき点は、谷口はムハンマドが聖人か、否かという問いではなく、カッコ付でムハンマドの「聖人性」を問い、聖人とは何か、にも着眼して論じているところである。さらに、その問いに応答するために相応しい研究視点と方法および定義を以下の通り明確にしているからである。

研究視点に関しては、以下の2点に焦点を絞っている。それらは、①「宗教が継続する」ための聖人研究から「倫理道徳の公共の広場における」聖人研究へと視点を変えることである。②執筆当時の時代と環境の提議する問題に即した「原・最高道徳」から現代の状況に合わせて翻訳する最高道徳への視点に帰ることである。

さらに、廣池の研究方法は、①真理探究方法では、天啓と聖人・偉人・宗教祖師の教訓が一致すること、②「学問的、科学的に」は、「方法的多元性と超領域的探究」であること、③廣池の示した道徳実行上の7つの条件、すなわち(1)動機、(2)目的、(3)方法、(4)時(時代・機会)、(5)所(場所・特定の場所)、(6)質、(7)量(『論文』①93-94)に照合した「現場主義」によることとしている。

そのうえで、聖人の定義を「人心開発救済」と「無我の慈悲心で純真で至誠で人のために働くことが天地の法則」(『論文』①81、⑤6-7)に従っていることとし、その概念の指標を「内面的基準」と「客観的基準」に分類し、個々に設けている。前者は、i) 天啓を受け、b) 伝統重視して、c) 迫害、周囲の無理解でも一視同仁、責任転嫁せず自己反省をしながら、d) 神意体得して品性完成し、利己的事業を企てず、e) 虚飾を廃し、礼儀・礼節重視し、f) 中庸を尚び、g) 自己の精神作用及び行為の基礎を神に置き、その心を相手に移植して人心開発救済する。さらに、h) 人為的に集権を有する団体をつくらない、i) 自己の苦勞の結果を全部人類に与えて人類の自発的模倣を望む(『論文』⑤7-11)ことと、内面的基準として九つの指標を挙げている。

他方、聖人の「客観的基準」は五つの指標から構成されており、それらは、a) 普通道徳を越えて人心開発救済して、b) 普及に関する原理(聖人の慈悲心と人心開発救済の至誠心)に則った聖人の感化力を持ち、c) 「無から有を生じる一大勢力」によって人心開発救済の努力をし、d) 宇宙自然の根本法則を実践していることを挙げている。

上記の聖人研究の視点、方法論、定義を定めたうえで、ムハンマドの「精神史的研究」

を通して、人類が共有できるムハンマド観を確立し、「ムハンマドの生涯と教説から世界の実情に貢献できる道徳原理を抽出する」ことを目指している。

廣池の回答に関する結論を先に言えば、谷口は廣池の記述を追認している。ムハンマドが自ら戦ったことについて「ジャヒーリア（無明）」時代にあつては、同じ部族から孤立無援で攻撃さえ受け、廣池が許される範囲の自衛のための戦闘であつた、と谷口は論じている。また、西欧から「略奪」と非難されたことについても、クライシュ族隊商のみを対象とした部族間ルールに従つた「ラズイヤ（略奪）」であり、ハムラビ法に基づく正当な「同害報復」と認識したうえで、ムハンマドの「聖人性」を先述の基準に照らし合わせている。これらの過程を経て『論文』執筆当時の軍国主義化を背景にして、わざわざ「20世紀以後」と期間を限定したうえで平和構築の模範とならないと判断したのではないかと、と欧米の偏見を避けながら谷口は結んでいる。

4. 今後の展望

これまでの道科研におけるムハンマドを中心とした聖人研究をまとめると、まず、①大塚が指摘したようにムハンマドとイスラームに関する基礎的知識を理解することが第一である。②その時に重要となるのが、服部と片倉の主張した視点である。それは、比較文明的、文化人類学的視点であり、現代を生きるイスラームの一般的な日常生活を知ることである。その実践方法として、服部の提起した「文明間の対話」は重要である。③ここでは、先ず、自分の価値判断を「 」に入れて、なぜイスラームがそのような行動をするのか、理性的、論理的に思考することで大切であろう。そのうえで、④自分の価値判断の前提を問ひながら共通点を求め、相違点を理解しながら対話を進めることである。この過程が、モラロジーが目指す世界人類の安心・平和・幸福に寄与する最高道徳実践の前提となるであろう。そして、これがグローバル化され、多元・多文化主義社会を生きる上での必須の「自己反省」となるであろう。

保坂の指摘した西洋の輸入学問としての宗教観・道徳観に基づく研究を脱したイスラームとムハンマド研究の重要性も上記の視点と軌を一にする。とりわけ宗教、道徳、倫理の未分化なイスラームとの対話を行う際に、この視点は重要である。西欧化、近代化、合理化される以前、すなわち明治期以前の日本であれば、イスラーム同様に宗教と道徳・倫理、政治、経済、教育が未分化な状態であり、それが近代化によって社会的に構造機能分化してきた。もう一度、イスラームとの対話に備えて、何が「伝統」的宗教、道徳、倫理なのかも確認しておく必要がある。

最後に、聖人研究の今日的課題・展望について一点だけ述べる。廣池は、『論文』第三緒言「第2条 将来モラロジー研究所において引き続き研究を必要とする諸項目の概要」の33にムハンマドを含めてゾロアスター教、ゼノン、老子、荘子などにも今後の課題として言及している（『論文』①：144-45）。もちろん一気呵成にそれらの課題に取り組むわけにはいかない。今後は、後半の発表にあるように日本社会の日常生活でも接する機会

増えたイスラームに集中すべきであろう。上記のごとく、ムハンマドの聖人性を研究することは、実は、合わせ鏡として最高道徳の実行者である聖人とは何か、を問い続け、研究を推進していくことである。

また、最高道徳の現代的検討、すなわち意義や実践に即して言えば、例えば、シュバイツァー、ガンジー、マザー・テレサのような身近な偉人の中に聖人性を応用して研究することが大切である。これら現代の聖人研究から、世界人類の安心・平和・幸福を実現するための具体的な手立てを我々が学べる機会となり、実践の動機付けとなる、と確信しているからである。

注記 発表後、服部英二氏から道科研と同一キャンパス内にあり、教員の兼担が多い麗澤大学の比較文明文化研究センターにおいてもイスラームに関する研究会および報告会を開催していたことをご指摘いただいた。しかし、発表の趣旨からモラロジーに特化した研究所の成果のみをとりあげた。

参考文献

- 大塚真三 (1983a)「ムハンマド (マホメット) 研究—その一」『社会教育資料』No. 86、広池学園出版部、146-59、6月
- (1983b)「ムハンマド (マホメット) 研究—その二」『社会教育資料』No. 87、広池学園出版部、122-37、9月
- (1983c)「ムハンマド (マホメット) 研究 最終回」『社会教育資料』No. 88、広池学園出版部、154-72、12月
- 片倉とも子 (2012)「講演論文 イスラーム文化と日本文化」『モラロジー研究』69 1-25
- 竹内啓二編著 (2010)『いのちと愛の思想—廣池千九郎の聖人研究の継承と発展』モラロジー研究所
- 田島忠篤 (2002)「戦後教科書に現れた宗教—地理・世界史の教科書索引に見るイスラム教関連項目数の変遷」、井上順孝研究代表『宗教教育の日韓比較』課題番号 1210031 平成 12 年度～13 年度科学研究費補助金 基盤研究 (c) (1) 研究成果報告書、52-65
- 谷口茂 (2011a)「預言者ムハンマドの「聖人性」について (1)」『モラロジー研究』67、37-68
- (2011b)「預言者ムハンマドの「聖人性」について (2)」『モラロジー研究』68、1-29
- 道徳科学研究センター編 (2009)『聖人思想とその現代的意義—孔子・釈迦・イエス・ソクラテスに学ぶ』モラロジー研究所
- 廣池千九郎 (1986-1991)『新版 新科学としてのモラロジー確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』モラロジー研究所 1～10 巻/別巻 (初版は昭和 3 年 12 月)
- 服部英二 (2009)「講演論文 イスラーム文明との対話」『モラロジー研究』64、35-53
- (2020)『地球倫理への旅路—力の文明から命の文明へ』北海道大学出版会、6 章に収録
- 保坂俊司 (1992)『シク教の教え—大乘仏教の興亡との比較』平河出版社
- (2000)『イスラームとの対話』成文堂
- (2008)『ブッダとムハンマド』サンガ
- (2004)「道徳の源泉としてのムハンマド (1)—イスラム教徒にとってムハンマドはいかなる人か?」『モラロジー研究』54、65-89
- (2005a)「道徳の源泉としてのムハンマド (2)—イスラム教徒にとっての宗教を理解するために」『モラロジー研究』55、33-49

- (2005b)「道徳の源泉としてのムハンマド (3)—イスラムにおける「宗教」を理解するために (その一)」『モラロジー研究』56、55-70
- (2007)「道徳の源泉としてのムハンマド (4)—何故ムハンマドは救済の手本とされるか」『モラロジー研究』60、85-96
- モラロジー研究所研究部編 (1975)『広池博士記念文庫洋書分類目録』モラロジー研究所
- モラロジー研究所研究部、欠端実編 (1977)『広池千九郎博士資料集 30 広池博士蔵書目録集』モラロジー研究所
- モラロジー研究所研究部、桜井東樹編 (1979a)『広池千九郎博士資料集 83 広池博士収集新聞集 第1集 (明治24年～明治45年)』モラロジー研究所
- モラロジー研究所研究部、桜井東樹編 (1979b)『広池千九郎博士資料集 85 広池博士収集新聞集 第2集 (大正1～大正15年)』モラロジー研究所
- (1979c)『広池千九郎博士資料集 86 広池博士収集新聞集 第3集 (昭和2年～昭和7年)』モラロジー研究所
- (1980a)『広池千九郎博士資料集 89 広池博士収集新聞集 第4集 (昭和8年)』モラロジー研究所
- (1980b)『広池千九郎博士資料集 91 広池博士収集新聞集 第5集 (昭和9年)』モラロジー研究所